

日本聖公会 川越基督教会

資料委員会 便り

ARCHIVES NEWS

第10号
2024年
3月31日
発行

教会の資料を掘り起こすことの面白さ

司祭 前田良彦



聖公会の歴史にも何の興味もなく過ごしてきた日々でした。たまたま教役者写真を見て「竹田真二先生だ。佐々木鎮次先生の若いころかな？」などと呟いていたのを諫山禎一郎さんが聞いて、「写真整理を手伝って」と言われたのでした。

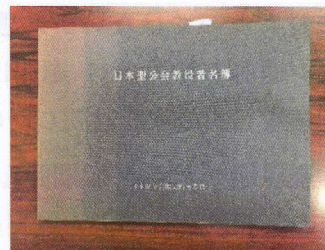
「日本聖公会教役者名簿」(日本聖公会歴史編集委員会 1980年6月29日)があります。わたしの名前も載っていますが、わたしの後輩たちの名前はありませんでした。この名簿が更新もされずにいたことを知りました。この名簿を更新してさらにデータ化して顔写真がついていたらいいという議論がもちあがり、管区の文書保管委員会で前田が担当するようになり、ということになりました。しかし顔写真もあつまらず何年も放置していました。そこで顔写真は諦めて、名簿をまず更新する作業を始めたのです。

洗礼名、名前、生年月日、逝去年月日、執事按手、司祭按手、主教按手、勤務地、備考をエクセルで作成して、友人たちに協力を依頼してタイプ印刷された名簿から移す作業です。管区事務所の名簿を提供してもらい、更新作業に2年ほどかかりました。しかし問題はこれからだったのです。

すでにタイプ印刷で作成された名簿の勤務地は不正確で調査が足りていませんでした。そこで、全国の各教会の記念誌などを読み勤務していた教役者の名前、勤務期間を調べ名簿に記入する作業です。これはとても難儀な作業で日本聖公会の各教会の記念誌だけではなく、基督教週報、日曜叢誌、教界評論、など明治以来の宣教機関誌を読むことも大事な基礎作業となりました。そこに記された「人事記事、個人消息」などを拾い集めたのです。これらの作業通して抜けている伝道師たちの名前を拾いあげることが出来たのです。

愚痴のような苦労話になりましたが、この作業を通して、各教会の記念誌は調査不足であることがわかりました。恐らく、宣教機関誌など明治から発行されたものを発見することが出来なかったのです。そこで、これからのわたしの作業は、基督教週報や日曜叢誌などを手軽に読めるように基礎的な情報を提供できたらいいと考えています。牧師たちに歴史感覚を養いなさいと言ってもなかなか無理なので、信徒のかたに聖公会の歴史に興味を持っていただくように訴えていきたいと思っています。

(聖公会歴史資料研究会代表・東京教区退職司祭)



一枚の写真から

ドウエル・ベリー

1908年、エリザベス・F・アプタン師は米国バサー女子大の先輩ガートルード・ヘーウッド師(川越で宣教中)に呼ばれて、クロティルダ・マータン医師と共に川越に到着した。二人がまだ正式の宣教師ではない頃のことだ。

それに先駆け、アプタン師は1905年から2年ほどグランドツアー(欧州巡遊旅行)に出かけていた。旅中、アプタン師はマータン医師と出会う。パリのソルボンヌ大学で短期留学などをしていた1905年秋、マータン家で下宿をすることになったのだ。マータン師の実家は医院だった。親しくなった二人は3年後、ヘーウッド師の招きに応じて川越の地へ一緒に旅立つこととなったのである。

幼児・女子教育に力を入れたアプタン師は埼玉県で多くの幼稚園などを設置している。既に宣教師の資格を取得していた1910年、疲れがたまっていたため4月から軽井沢の別荘へ保養しに行くことになった。初代日本聖公会東京地方部(現北関東教区)のマキム主教により半年間の休暇許可が与えられたのである。その年の夏に撮った写真には、マータン医師と彼女の8歳の姪と思われる少女も一緒に写っている。アプタン師の1905年末の日記には、マータン医師の兄弟は日本で活躍中、との記述があり、マータン家の孫がその頃日本で生まれた、ともある。推測ではあるが、写真のマータン医師の姪は日本に滞在している兄弟の長女なのではないかと思う(1910年秋にマータン医師が神戸へ1週間ほど行ってきた、との記述も兄弟の家を訪問したのではないかと想像)。

避暑地での幸せな雰囲気から一転。1910年8月10日、荒川が洪水災害にみまわれた。アプタン・マータン師は休暇を中止、急いで川越・大宮周辺の被災した子供たちの保育などにあたり、災害救助に尽力したのである。



(写真) 1910年夏 左からヨハネ金井西蔵(1歳弱、アプタン師は被後見人になった)、マータン医師、彼女の姪(8歳)と思われる、そしてその右がアプタン師、おそらく軽井沢の別荘にて

参考文献・教会資料

- 1905年～1906年「アプタン師の日記兼実家への手紙」グランドツアーの頃
- 資料番号 182「川越基督教会教籍簿」ヨハネ金井西蔵
- 1910年前後「アプタン師の日記兼実家への手紙」川越在住の頃
- 1910年夏「軽井沢の写真」
- 1981年『みどりの舟 アプタン先生の愛仕の生涯』森清一著(毎日新聞社発行)

「白石さんちの生協」資料 見てみた聴いてみた読んでみた

～教会アーカイブズから～

玉木純子

久しぶりに資料委員会に出席したので、アーカイブズを利用してみました。



白石伍朗さん(左) 山本英二さん(右)

第二次世界大戦後の食糧難の時、信徒の白石伍郎さんが高階地区で生活協同組合を始めたことは有名な話です。それ以前に教会内で生協が試みられていたということはあまり知られていませんでしたが、『川越基督教会130年史(以下『130年史』)』では資料委員会の委員長であった故松村祐二さんがそのことについて記しています。その証拠たる「愛隣生活協同組合」の資料は2019年に山本家から寄贈されました。2020年にベリ・ドゥエル委員長が「川越学事始め」という市の講座で発表し、存在を広く知らせています。さいたまコープの最初の一步がこの教会で試みられていたことを裏付ける貴重な資料なのです。

見てみた～一連の資料は未登録でデジタル化が完了していなかったもので、茶封筒に入った現物を慎重に取り出して見てみました。以下はその内容です(状態はほとんどがセピア化しています)

①販売案内の葉書(6枚)…毎月第2、4週目の礼拝後から3時まで、会館で販売を行う。②申込書(21枚)…21名分の申し込み口数(一口十円)、年月日、住所、氏名、印鑑の記入。③定款の草案(16枚)…

総則、組合員、期間、事務の執行、経理、解散、附則。2枚セット。④注文書類(便箋やメモ9枚)…氏名、品名、数量、金額、受け渡しチェックなどが記入(注文品は味噌、醤油、石鹼、うどん、味噌漬、モナカ、鼻緒、カレー粉)。⑤NOTE BOOK「愛隣生活協同組合」…25名の賛同者名簿。昭和21年10月13日～22年5月11日までの会計帳(ソース、もろこし、ソダ切り(薪)などの「利益金」やノリも)。

読んでみた～他の資料群に小冊子『生協とともに三十年を歩んで 白石伍郎、せつご夫妻を偲んで』(1985年。市民生協さいたま生活協同組合)もありました。ご夫妻へ感謝の文章が数多く寄せられる中、牧師の松平惟太郎師、松村泰明師、信徒の山本英二さん、松村恒夫さんが熱い思いを記されており、これはキリストに倣う永遠の命の証言でもあると感じました。

聴いてみた～さらに『130年史』の参考テープ「父白石伍郎・セツの思い出」を聴いてみました。これは既にデジタル化されていたので、リンクを送ってもらって自宅で聞くことができました。旧委員長の山本元さんと祐二さんが、白石さんのお嬢さんたちに聞き取りをしています。白石さんは、安く仕入れたら安く売ちなさい、と言って皆を困



現在の仲町のコープ

らせてしまうほどの実直なお人柄。セツさんは「家庭会」の会長をして地域を支えていたのに、子供たちにとっての我が家は、あるような、ないような、感じだったようです。当時、任意生協が多くあったのに皆つぶれてしまったのは、犠牲的な人がいなかったからだろうという話がありま

した。白石さんの生協、セツさんあつての生協、いろんな語られ方がなされているかと思いますが、一連の教会アーカイブズを紐解いてみて、私は「白石さんちの生協」という言い方もありかもしれない、との感想を抱いてタイトルにさせてもらった次第です。

礼拝を見守る記念タブレット

降臨節前主日は教会恒例の冬の大掃除である。礼拝堂の窓ふきをしていたら チャンセル壁面の白いタブレットが目に入った。「田井長老記念タブレット」である。日頃、見慣れて気に掛ける事もなかったが、改めて調べてみる事にした。

田井司祭の逝去後12年を経た1939年(昭和14年)にこの記念碑は設置された。制作担当されたのは当時聖公会関係の建築物を数多く手がけた聖路加病院建築部の上林敬吉氏。原文字を刻印されたのは、当教会信徒の森田角三郎氏である。銀白色大理石のこの銘板は重量14Kg。総製作費70円、長年の指定積立金の他に新たに12名の献金が寄せられた。この年11月5日に開催された聖別式。ライフスナイダー主教司式、説教は当教会出身の片岡常吉司祭、田井司祭の孫である田井泉氏が除幕をされた。

この記念碑設置を草案、企画されたのは、1922年(大正11年)から当教会を司牧された奥村亮司祭であった。このタブレットが設置された昭和14年は礼拝堂内の備品類が数多く新調された。聖歌番号表示版、入口壁面の献金箱、礼拝堂入口床タイル張り。これら全て指定献金で出来たもので現在も健在である。翌年、奥村司祭は前任地の東京教区諸聖徒教会へ転任された。

篆書体で全文読むのは難解であるが、一部を今様に訳し紹介してみると

山本 元



田井師記念タブレット

日本聖公会最初の邦人聖職 川越基督教会の設立者

神の栄光 長老田井正一師 記念の為
我れ善き戦いをたたかい走るべき道程
を果たし信仰を守れり、今より神義の
冠わが為に備われり。(※)

コミュニオンレールの脇に掲げられたタブレット、85年もの間、私達がいただく主の陪餐を見守ってこられた。感謝

(※) タブレットの中の聖句はテモテへの手紙二

歴史資料委員会より

水曜日の委員会

毎週委員会は続いています。昨年は48回の委員会が開催されましたが、保存資料を中心にした勉強会、4台のスキャナーを駆使して資料の保存作業をやりました。楽しい談笑を交えて、行われていますのでどなたでもご参加ください。

三芳野天神社



田井正一司祭は、明治34年に川越専住に伴い、教会の牧会を中心に幼稚園、女学校の設立、運営において、地域の各方面の多くの方々と交わりを深めた様子が各種保存資料

等の中に記録されています。

そうした一環として、市内郭町に現存する川越城の中にあつた三芳野天神社、「とおoryんせ」の詩のモデルともなったこの神社は大正11年に大改修が行われ、この改修寄付者名を記した石碑が神社脇に建立されており、ここに田井師の名前が記されています。宗派の枠を超え地元の方々との交流の姿が見えてきます。

画像保存

教会の全資料は画像保存されています。検索機能を用いて必要な資料を取り出す事が出来ます。時折行われる教会での葬儀、故人に纏わる文章等リプリントして、ご家族に差上げています。

保存資料がこうした面でも活用されています。

聖公会神学院訪問

3月11日、約3年ぶりに聖公会の神学院を訪問しました。用賀駅から徒歩で10分あまり、閑静な場所にあります。



1911年に設立されたという神学院は戦時下での外国人教授辞任、政府の指示による廃校などを経て、1946年に学校法人「聖公会神学院」となりました。今日まで約600名の卒業、修了生があつたということです。

資料室には様々な古い貴重な資料が残っており、整理された我が教会の資料もありました。約3万冊の蔵書を備えた図書館もあります。



お知らせ

今回から紙面を刷新しました。既刊をご覧になるには、ホームページ「川越基督教会」を立ち上げ、歴史資料委員会のページを開くと全号をご覧いただけます。

歴史資料委員会発行 (2024.3.31)